Granny Yae's Garden
by neverson

「美佳？これ、弥栄ばあさんにお裾分け。もってってちょうだい。」
美佳はあからさまに嫌そうな顔をした。
「美佳、きいてるの？」
美佳はそのまま教科書をぱたんととじて、台所にむかう。
母から手渡されたのはなんとか温泉とかかれたお饅頭の箱だった。
しぶい緑色の和紙の箱に、さえないキャラクターがのっている。
「三丁目の木下さんのおみやげなんだけど、うち、そんなに必要ないでしょう？甘いものっていったらあんたしか食べないし。だからこれまだ、半分のこってるからおばあさんにもっていってちょうだい。あの人和菓子が好きだから。」
美佳ははぁーっとため息をついた。
「あたしがもってかなきゃだめぇ？」
「あたりまえでしょう。お隣に届けるだけなんだからそれくらいやんなさい。お母さん夕飯の支度したあと仕事いかなきゃいけないのよ。」
それをいわれては美佳も反論できない。
なぜなら家は母子家庭で、父の遺産と母の働きで美佳は養ってもらっているのだから。
「はーい。」
美佳はため息まじりに返事をした。
弥栄ばあさんと美佳は血のつながった家族というわけではない。
ただ、美佳の母親が幼い美佳を連れてとなりのアパートに引っ越したとき知り合ったらしい。
幼いころから美佳は弥栄ばあさんの家で出入りして、
母親の帰りを待っていたものだ。
弥栄ばあさんは、昔から口数が少ない。
気むずかしくて、小言が多い。
だけど、美佳の面倒はしっかり見てくれたし、
美佳もそれなりになついてはいたのだ。
弥栄ばあさんは裏庭に小さいけれどにぎやかな花畑をもっていた。
その花畑は季節によって、朝顔がさいていたり、
チューリップがさいていたりと、いつもカラフルだった。
弥栄ばあさんは毎日毎日その花に水をやり、手入れをする。
美佳はそんな弥栄ばあさんの花畑が昔から好きだった。
だけど、弥栄ばあさんは偏屈で怒りっぽいお年寄りでしかないのだ。
だから美佳は弥栄ばあさんの家にあまり寄りつかなくなっていた。

インターホンを押す。
ドアのむこうから、ピンポーンという音がひびいてくる。
足音も物音もしない。
ただ一言、
「開いてるよ。」

という弥栄ばあさんのしわがれて不機嫌な声が聞こえる。
美佳はゆっくりドアを開けた。
「おじゃましまーす。」
おそるおそる玄関に入り、あたりを見回す。
「ばあさん？これ、おすそわけだってお母さんが。ここにおいてくから食べてね。」
美佳はそれだけ言ってのけると一歩後ずさってドアノブに手をかけた。
「お待ち。」
ばあさんのしわがれた声が美佳をひきとめる。
美佳は聞こえないようにため息をついた。
「あがっていったらどうだい。久々に顔みせにきたんだから、挨拶くらいしてったらどうだい。」
あいかわらず不機嫌だ。
美佳はしかたなく言うとおりにした。
玄関にはいって、すぐ隣のふすまを開ける。
そこは畳の居間になっていて、花畑に面している。
弥栄ばあさんはその縁側に座ってお茶を飲んでいた。
美佳には目もくれない。
「お茶、さめてきちゃったからいれてきてちょうだい。」
弥栄ばあさんは湯飲みをさしだす。
美佳はむっとした顔で弥栄ばあさんを見る。
「あたしは弥栄ばあさんの面倒みにきたんじゃないんだからね！！」
弥栄ばあさんは涼しい顔をして花畑を見つめている。
「あー、もう。」
美佳はしぶしぶ湯飲みと急須を机の上にあったお盆に乗せて台所に行く。
お茶っ葉の在処も、やかんの在処も昔と変わらないから美佳にはこの台所を使うことに慣れていた。
しばらくして、美佳が入れ直したお茶を机におき、湯飲みにつぐと弥栄ばあさんに渡した。
「じゃあ、あたしもういくからね。」
美佳は一言そういった。
「あんた、そこにすわんなさい。お茶くらいのんでいけばいいじゃないか。」
弥栄ばあさんはあいかわらず美佳に目もくれずに引き止める。
「はいはい。」
そういうと美佳も湯飲みにお茶をつぐと、
あのお裾分けの甘そうなお饅頭に手をつけた。
しばらく、美佳も弥栄ばあさんも、何もしゃべらなかった。
急に外は曇りだして、雨がぱらついてきた。
空気はじめじめと蒸し暑い。
なんせ六月の雨期まっただなかなのだ。
もちろん、庭のかたすみのアジサイは元気そうに花をつけている。
「まったく、最近の若者は・・」
ふと弥栄ばあさんは呟いた。
それは嫌味とも独り言ともとれる。

「誰のおかげで食ってけるとおもってんだろうねぇ。
えっらそうに、口だけ達者なんだから。」
美佳は机に肘をついた。
（またはじまった・・）
弥栄ばあさんは近くに誰かがいるといつもそんなふうに「最近の若者」の悪口を話出す。
「今この日本が平和なのも、年長者の功績じゃないか。それなのに、年寄りをいたわることもできない。感謝の気持ちもない。贅沢にぶくぶく太って、遊び回っている。
まったく、この世も末だね。」
弥栄ばあさんは悪口を呟いている間にも美佳の顔は見ない。
言うことがあるんなら堂々と正面向いていってほしい・・と美佳は思うんだが。
「戦争中は贅沢なんてできなかったんだ。空襲ばっかで逃げ回るしかなくて、たくさんの人が死んでいったんだ。それなのに、なんだい？
戦争がおわったら若者はみんなへなちょこになっちまったよ。
アメリカにへいこらして、ちっともたくましくなんかないじゃないか。
この国の将来が不安だよ。」
戦時中の話をするのもいつものことだ。
そんなに戦争中が良かったのならその時代にもどればいいのに・・と美佳は思った。
「ねぇ、おばあさん、あたし、宿題やんなきゃいけないから帰るね。」
美佳は一言言うと立ち上がった。
その時、ばあさんは初めて振り返った。
「まったく、何が宿題だ。どうせたいした勉強もせずに家の手伝いもせずに、毎日遊び回ってるんだろう？」
美佳は思いきり顔をしかめた。
「っていうかさぁ、あたし受験生なんだから勉強が一番大事にきまってんじゃん。
いい加減にしてよ。ばあさんの愚痴を聞きにくる時間なんてないんだから。」
ばあさんは音を立てて湯飲みを置く。
「何が、‘っていうかさぁ～’だ。あんたは正しい日本語の使い方も知らないんだろう。そんなやつがまともな高校に入れるんだかねぇ！」
「あー、もういい加減にして。なんでばあさんは悪口しか言えないの？
あたしだって勉強頑張ってるし、お母さんの手伝いだってしっかりしてるじゃん。
いったい何が気に入らないわけ？」
「あー、嫌だ嫌だ。あんたはすぐにこれだ。久々に顔見せたとおもったら、憎まれ口ばっかだ。」
「憎まれ口はどっちよ！」
「年寄りに対する口のききかたを、学校で教えるべきだねぇ！
昔はあんたみたいなしゃべり方するやつは一人もいなかったよ。」
美佳はもう何も言い返す気分ではなかった。
いつもこうなのだ。
いつもかみ合わない会話で嫌味を言われ、言い返して、口げんかで終わるのだ。
「もういい。帰る。」
美佳はもう一度ばあさんをにらみつけるとばあさんに背を向け、家を飛び出した。
「ばあさんになんてもう会いにいくもんか。」

美佳は一言そう呟くと、雨の中に飛び出して、隣の自分のアパートに駆け込んだ。
美佳の気分は最悪だった。
梅雨のうっとおしい雨にばあさんの憎まれ口。
きっとばあさんは花にしか愛情を示さないのだ。
ふつうだったら、血はつながっていなくても、昔からよくしっている子供なら孫と同じ様な愛情も見せたっていいものなのだから。
「いいもんね。もうばあさんなんか一生一人で花の世話してればいいんだ。」
美佳は厚い雲で覆われた空をにらみつけた。

美佳がばあさんとケンカして一週間が過ぎたときのことだった。
その日も激しい雨が降り続いていた。
美佳は朝、大急ぎで学校に行く途中だった。
ぽかぽか信号が青から赤に変わりかけていたので、
美佳は走って横断歩道をかけぬける。
その時・・
美佳の赤い傘が宙に飛んだ。
美佳は一瞬全身に痛みを感じた。
そして車のライト見た。
そのまま視界はくるりと回転したと思ったら次に見えたのは雨降りの暗い空だった。
しばらくすると美佳の意識はなくなった。

美佳が次に目を開けた時、見えたのは平原に一本道だった。
花が咲き、風にゆれている。
空はあの梅雨の雨雲のように暗い。
「ここはどこだろう？」
美佳はとりあえず道を歩きだした。
そうしなければいけない気がしたのだ。
道を歩く過程で美佳はいろんな事を思い出した。
小学校に入学したときの事。
運動会の思い出。
卒業式の思い出。
中学の部活のこと。
大好きだった先生やクラスメイト。
弥栄ばあさんの顔。
お母さんの顔。
「そうか、あたしは死んだのか。」
美佳は意外とあっさりと納得した。
なぜかわからないが、自然とそういう結論の達したのだ。
きっと死とはそういうものだろう。
「あたしは天国にいけるのかな。お母さんは悲しむかな。最後に弥栄ばあさんに謝っておけばよかったな。」
そう考えるうちに美佳の頬には涙が伝った。
「そっか。あたしはまだ死ぬ準備ができてないんだ・・・」
このままじゃ、自縛霊とかになって写真にうつって怖がられたりしちゃうかもなぁ・・とぼんやり考えたりした。
しばらく歩くと遠くのほうの空に一部光が射していた。
雲の隙間から現れる太陽の光のように。

そして美佳は同時に川の流れる音を聞いた。
美佳が光りのさす方向へ歩くと、そこには河原があった。
一つつんでは父のため・・
二つつんでは母のため・・・
「ああそうか、ここは三途の川なんだ・・。」
美佳はすぐにそう思った。
だけど不思議だったのはその河原には幼い子供たちしかいなかったということだ。
「三途の川って、死んだ人がみんなわたる川よね・・・？」
美佳は首を傾げながら河原に降りた。
そこで子供たちは美佳のほうに目をむけるわけでもなく、ただひたすら石を積み上げている。
「ここは賽の河原じゃ。」
美佳の後ろで誰かの声がした。
美佳が振り向くとそこには年老いたお坊さんが立っていた。
「あなたは？」
「わしはこの河原の番人じゃ。」
お坊さんはそう言うと、美佳の横を通り過ぎ、持っていた杖で子供たちの積み上げた石の山を壊し始めた。
子供たちは無表情で一瞬哀しげな顔をするともう一度最初から石を積み上げだす。
それの繰り返しだ。
お坊さんは一通り高く積み上げられた石の山をくずし終わると河原に座り込んだ。
「どうしてそういうことをするの？」
美佳は尋ねた。
「言ったであろう、わしはここの番人なのだ。」
お坊さんは哀しげに呟いた。
「わしはただ、この子供たちを早く天国へ登らせてやりたいのじゃ。」
美佳は首を傾げた。
「この子供たちはな、ここに縛られておるだけなのじゃ。
親より先に死んだ子供は、すぐに天国には戻れない。
なぜなら子供の死を悼む親の未練が強すぎるからじゃ。
それが子供をこの河原に縛り付ける。だけどこの子供たちはそれを知らない。
だから、ただ天国に登ろうと石を積み上げるだけなのだ。
ほら、あそこに・・」
お坊さんは点を指さした。
そこにはさきほど美佳が気づいた、厚い雲から光がさしている場所があった。
「あの雲の隙間から天国にいける。
だけど子供達は何も石を積み上げなくてもよいのだ。
子供たちが天国に上がろうと思うだけでいいのだ。だけどそれを未練が邪魔をする。
親がこの子らを思う気持ちと、この子らが親を思う気持ち。それが子供たちをここに縛り付けている。だから石を積み上げるのは必要ないのだとわしは早くそれに気づいてもらいたい。そして早くこの子たちに天国に登ってもらいたいのじゃ。」
お坊さんは静かに言った。
「ところでおまえさんはどうしてここに来た？」

「あたしは・・たぶん死んだからここに来たのだとおもいます。」
美佳がそういうとお坊さんは大きく首を傾げた。
「おまえは死んではおらん。ここにいるはずのない者だ。
不思議なこともあるものだなぁ。」
その時だった。
ふいに美佳の頭上から光がさしたのだ。
そして美佳が上を見上げると光の中から何かが舞い降りてきた。
美佳はそれを受け取ろうと手を伸ばした。
光の中からふわり、ふわりと落ちてきたのは花びらだった。
花びらはゆっくり舞いながら美佳の手の平に落ちた。
「アジサイ？」
美佳は首を傾げた。
その時、美佳のすぐそばで石を積み上げていた子供が美佳のほうに歩み寄った。
そして美佳をじっと見つめた。
「どうしたの？」
美佳はしゃがみ込むとその子供を見た。
女の子だった。６，７才くらいの女の子で、顔はすすで汚れている。
そしてその女の子は防空頭巾をかぶっているのだ。
「あなたは戦争中に死んでしまった子なのね・・・」
美佳はその女の子の目を見つめた。
女の子はふいに瞳をぱっと輝かせた。
その目は死んだような目をしている他の子供たちとは違う。
女の子は美佳に微笑み、美佳の手の平からアジサイの花を手に取った。
「おねぇちゃんの花・・・お花畑・・作ってくれた・・・」
女の子は一言そう言うと嬉しそうにその花びらを両手で包み込み、微笑んだ。
「あなた名前はなんていうの？」
美佳はふいに尋ねた。
「千代・・」
「そう、千代っていうの・・・」
「お花、たくさん咲いてる？」
千代は尋ねた。
美佳はどこの花のことを言っているのかわからなかったが、
なんとなく弥栄ばあさんの花畑を思い浮かべた。
「ええ。庭中花でいっぱいよ。今の時期はアジサイがうわっているわ。」
美佳は優しくそう言った。
「ありがとう・・ありがとう・・」
千代はそうつぶやき続けた。
美佳にはなにがなんだかよくわからなかった。
「そろそろ、戻ったほうがいい。」
お坊さんは美佳に言った。
「戻る？戻れるの？」
「あたりまえだ。来た道を引き返すだけだ。ただ、振り返ってはならん。振り返るとここに戻り

たくなるかもしれんからのう。」
美佳は立ち上がり、もう一度頭上を見た。
まだアジサイの花びらが再び舞ってきている。
ふいに千代に視線を戻した。
千代はもう石を積み上げるのをやめ、ひらりひらりと舞い落ちる花びらを嬉しそうに眺めている。そして、その体は光に包まれている。
「この子は天国に上れるかもしれん。」
お坊さんは嬉しそうに呟いた。
美佳はどういうことなのかよくわからなかった。だけど、早く戻りたかった。
お母さんと弥栄ばあさんに会いたかった。だから美佳は河原を後にした。
最後に千代に微笑みかけ、歩き出す。振り向かずに。
思い出を頭に浮かべ。
大切な人たちの顔を頭に思い浮かべ。
そして元来た一本道を引き返した。

美佳は目を覚ました。
最初に見えたのは白い天上だった。
そして次に見えたのはアジサイの花びらだった。
「あ、あじさい？」
美佳は体を起こした。
回りを見渡すと、そこは見覚えのない部屋だった。
そして独得の匂いが鼻をつく。
（病院だ・・）
ふと横を見ると、ベッドサイドのテーブルに花瓶からあふれんばかりにいけられたアジサイがあった。
そして美佳の肩や髪にはそのアジサイがちらした花びらが何枚も乗っていた。
（そうか・・あのとき、光の中から落ちてきたのはこれだったんだ・・）
その時、部屋のドアがゆっくり開く。
「お母さん・・・」
美佳は呟いた。
「戻ってきたよ、お母さん・・・」
美佳のお母さんは何もいわず美佳に走り寄ると強く美佳を抱きしめた。
「まったく、あんたって子は心配かけて・・。怪我なんてしてないのに目をさまさないんだもの。もうダメかと・・・。」
「ごめんなさい、お母さん。でもちゃんと戻ってきたから。」
お母さんは首を傾げた。
「どこから？」
「ううん、気にしないで。」
お母さんはふとアジサイに目をやった。
「弥栄ばあさんがね、あんたが事故にあったっていうのを聞いて大急ぎで駆けつけてくれたのよ。こんなにいっぱいのアジサイを持って、ずっとここにつきっきりであんたのそばにいてくれたのよ。ちゃんとお礼いわなきゃだめよ。」
美佳は驚いた。
あの弥栄ばあさんが美佳のお見舞いにきて、そばにいてくれた。
美佳はなんだか嬉しかった。

その後、美佳はいくらかの精密検査を受け、異常がないと分かるとすぐに退院した。
美佳は退院するとすぐに弥栄ばあさんの家を訪れた。
玄関に入り、居間を横切ると、弥栄ばあさんが庭で花の手入れをしている姿が見える。
「弥栄ばあさん・・・」
弥栄ばあさんは美佳のほうを見ずに花に水をやる。
「まったく、あんたって子は親にさんざん心配かけて。とんでもない親不孝ものだね。」
美佳は何もいわず庭に降り、弥栄ばあさんのそばに寄った。

「・・・・お花、ありがとう。」
弥栄ばあさんは何もいわなかったがその横顔は優しかった。
「千代ちゃんも、喜んでいたよ。」
美佳は呟いた。
すると弥栄ばあさんは驚いたような目つきで美佳を見る。
美佳にも、なぜ千代の名がそこで出てきたのかよくわからなかった。
けれどばあさんの横顔がなんとなく、千代を思わせたのだ。
ばあさんは驚いた顔で美佳に近寄ると、肩を揺さぶった。
ばあさんは小さくふるえていた。
「千代って・・・千代に・・千代に会ったのかい？」
やっぱり弥栄ばあさんと千代はつながりがあったんだ。
美佳は頷いた。
「ありがとうだって。」
弥栄ばあさんの目は涙でいっぱいだった。
「あの子は・・・わたしを恨んでいたかい？」
美佳は千代の笑顔を思い出した。
もしあの子が弥栄ばあさんを恨んでいたのなら、あんな顔するわけがない。
「お姉ちゃんが花畑を作ってくれたって・・嬉しそうだった。
お姉ちゃんって・・・弥栄ばあさんの事？」
弥栄ばあさんは目をこすって頷いた。
「千代は妹だ。」
そして弥栄ばあさんは遠い目をして語りだした。
「あのとき、空襲が続いていてねぇ、家が炎に包まれた。
逃げまどう人で道はいっぱいだった。
わたしは母さんの手をつないでいて、わたしが千代の手を引いていた。
だけど・・・わたしのすぐよこで燃えた建物が崩れたとき、
わたしはあの子の手を離してしまったんだよ。
そのまま、千代は人混みに紛れてしまった。
そしてすぐにまた爆撃があり炎に包まれた。
あの子が、おねぇちゃんおねぇちゃんって叫んでいた声がずっと耳に残っていたよ・・」
弥栄ばあさんは涙を流した。
「あの子は、戦争が早くおわればいいのに。
そうすれな大好きな花が焼け野原になることもないでしょう？
って、よく話していた。
焼け野原には花一本見あたらなかったからねぇ。
だから戦争が終わったら、一緒に花をいっぱい植えようねと約束したんだ。
焼け野原を花いっぱいにしようってねぇ。」
美佳は弥栄ばあさんを抱きしめた。
弥栄ばあさんの体が今日はとても小さく見えた。
美佳はふいに、あのお坊さんの言っていたことを思い出した。
未練は賽の河原に子供達を縛り付ける・・・
そして美佳は弥栄ばあさんに言った。

「千代ちゃんが天国に上れるように祈ってあげようよ。
自分をせめちゃだめだよ。そして千代ちゃんのことを悔やむよりも、
千代ちゃんの笑顔を覚えていてあげようよ。
そうすればきっと、千代ちゃんは天国にいけるよ。」
美佳もその後弥栄ばあさんと一緒に泣いた。
夜遅くまでずっと弥栄ばあさんと一緒にいた。
弥栄ばあさんの口の悪さは変わらなかったけれど、
心なしかばあさんの口調は前より少しばかり優しくなった気がした。

美佳は梅雨の暗い雲で覆われた空を見つめた。
雲の隙間から太陽の光が射しているのを見つけたのだ。
そして祈った。
あの河原の子供たちが皆天国にいけますようにと。

今日も美佳は帰りに弥栄ばあさんの家に寄る。
弥栄ばあさんと一緒に花をながめる。

ふわりと初夏の風にゆられた朝顔はどことなく、千代の笑顔に似ている気がした。